

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

〔談話室〕 アメイジング・グレイス

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2026-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩瀬, 由佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001880

アメイジング・グレイス

岩瀬由佳

奴隸船の船長を務めていた英国人ジョン・ニュートン（一七二五—一八〇七）が賛美歌「アメイジング・グレイス」を作詞したことはよく知られる。彼は二十二歳の時に嵐に遭うが、神に祈りを捧げて奇跡の生還を遂げた。三十歳の時に脳出血で倒れて奴隸船を降り、八年後に牧師になったという。その頃に賛美歌の作詞をしたらしい。その後、五十代になつてから奴隸制度廃止運動に関わるようになった。

ロンドンには文化的多様性に満ちている。二〇二五年の日本は大阪・関西万博に沸いたが、ロンドンは一年中、世界の文化博覧会のようなのだ。ノッティンゲル・カーニバルや、トラファルガー広場のディーワーリーや聖パトリック・デー・パレードなどの年に一度の大きなイベントだけではない。たとえばベカムでは、毎週末に西アフリカマーケットが開催される。ベカムには白人も住んでいるが、白人は別の通りのパブでくつろぎ、黒人はマーケットで故郷の味を楽しむ。話題のミュージカル『シックス』では、ヘンリー8世の妻たちが多様性を感じる配役だ。

ロンドンでは、多様性を認め合う共生社会に向けた様々な取り組みが進行している。それは、国内の見学者が多い小規模な博物館も例外ではない。ドックランズ博物館とホーム博物館の展示は、人権思想や歴史の再検証との関連から興味深い。

ドックランズ博物館の展示は、造船と近隣コミュニティの発展、砂糖と奴隸貿易、両世界大戦とドックランズの関わりを中心とする。

砂糖と奴隸貿易の展示では、黒人奴隸貿易に関わった白人の紹介方法が少し変わっている。彼らはまず奴隸所有者や

奴隷商人として紹介され、個人名は肖像画下の説明部分に小さく書かれる。最初に個人名を出す一般的な展示とは逆だ。肖像画に描かれた、立派な身なりで穏やかな笑みをたたえた人物。一方、個人名より先にでかでかと書かれた「奴隷所有者」などの衝撃的な文字。そのギャップが見学者に与えるインパクトは大きい。

英国における黒人解放運動に尽力した人物として、オラウダ・エクイアーノ（ca.1745—1797）が知られる。彼とほぼ同時代の文筆家・作曲家のイグネイシヤス・サンチョ（1729—1780）は黒人として初めて選挙で投票した人物で、近年注目されている。ドックランズ博物館ホームページは、ここで見るべき十の展示の二番目にサンチョの手紙を挙げている。（しかし、展示の現場が追いつかないのか、展示室では非常に目立たない。）また、二〇二四年三月に、グリニッチ公園内にサンチョの名前を冠したカフェが開店し、地元の英雄として再認識されつつある。彼はロンドン公文書館の通路展示（常設）でも紹介されている。

ホーム博物館では、英国の家庭で使われていた物品等の展示のほか、一六〇〇年代以降の白人中流階級家庭における居間や客間の展示が圧巻だ。使用人の居場所や、雇い主の家庭と彼らの関わり方に着目しているのが興味深い。

現在は、国民の多様性を反映させて、移民等の生活が展示に加わった。例えば、一八七八年のタウンハウス展示の主人公は、白人家庭がコルカタからロンドンまで移動する三か月間、子守として雇われたインド人女性だ。一九一三年の共同住宅の展示では、金曜日の夜（安息日）を過ごすユダヤ人家族を紹介する。また、一九七八年のテラスドハウスの展示からは、労働者階級の黒人の暮らしが垣間見える。壁面の掲示「ボール遊び禁止」から、ここがカウンシルハウスであることがわかる。さらに、LGBTQI+カップル（説明文を読まないといけないが）とその同居人の部屋は、ジェンダーの多様性を盛り込んだ展示だ。

このように、ホーム博物館は英国国民の多様性——人種、階級、ジェンダー等——を来館者に考えさせる構成へと変化

した。「アメイジング・グレイス」を聴くと、ロンドンを思い出す。「アメイジング・グレイス」は黒人霊歌として紹介されるほど、黒人にも受け入れられ、愛される賛美歌となった。